

第3部 「近代舞踊とアーカイブス」

鼎 談 : 黒 沢 輝 夫 (舞踊家)
石 井 登 (舞踊家)
片 岡 康 子 (お茶の水女子大学名誉教授)

.....

試 演 : 石 井 漠 作品《山を登る》復元
石 井 登・土 屋 麻 美

.....

若 松 美 黄 (現代舞踊協会理事長)

貫 第3部「近代舞踊とアーカイブス」を始めたいと思います。

初めにまず、お話しいただくゲストの先生方を紹介したいと思います。

まず初めに、このコーナーでは舞踊学会副会長である片岡康子より簡単なイントロダクションをいたします。(拍手)

そのあと舞踊家でいらっしゃいます黒沢輝夫先生にお話しをいただくことになります。(拍手)

黒沢先生をご紹介させていただきたいと思いますが、先ほどのお話にもありましたように秋田県のご出身、舞踊家でいらっしゃいまして、黒沢輝夫・下田栄子モダンバレエスタジオを主宰していらっしゃいます。神奈川県芸術舞踊協会の会長を長年務められ、現在は名誉会長でいらっしゃいます。1947年に上京されて、石井漠先生の門下となったことが初めてであったということでございます。舞踊コンクールの指導暦は55年ということで、その間に石井漠賞、松山バレエ団顕彰教育賞などを多数受賞していらっしゃる先生でいらっしゃいます。よろしくお願ひいたします。(拍手)

そのあと、石井漠さんがお創りになった作品の試演がございまして。その復元試演をしていただきますのが、石井登先生でいらっしゃいます。石井登先生は、舞踊家でいらっしゃいまして、お祖父様が石井漠先生で、お父様が石井鷹士先生、叔父様が石井眞木先生ということで、現在は石井漠記念創作舞踊団の代表を務めていらっしゃるということでございます。よろしくお願ひいたします。(拍手)

なお、その時に一緒に踊っていただきますのが、こちらにいらっしゃいます土屋麻美さんになります(拍手)

最後に、舞踊学会前会長であります若松美黄がまじってお話をさせていただくということになります。(拍手)

では、よろしくお願ひいたします。

片岡 最初にイントロということでお話をさせていただきます。第1部古典バレエ、第2部舞踏、そして第3部は「近代舞踊とアーカイブス」ということで、20世紀に進展した近代舞踊、特に日本の近代舞踊ですが、さらにまた今日は石井漠というパイオニアに光を当ててアーカイブスのことを考えたいと思っております。

私は実は石井漠の弟子ではないわけですが、東北の盛岡という城下町で育った幼い頃に漠先生の全国ツアーの舞台を拝見しております。石井漠というお名前も知らずに、またこの舞台が石井漠先生の公演だということも知らずに、何歳でしたでしょうか、7歳、8歳の頃に見た記憶があって、その踊りの強烈な印象はあったのですけれども、それが石井漠の舞台であったということ、1986年に、石井漠生誕100年記念プロジェクトが行われた時に知りました。その企画に関わらせていただいていたのですけれども、小さい頃の記憶がそこで結びついて、何かとてもご縁を感じたという石井漠先生です。石井漠先生が没後40年にあたる2002年にも記念企画がありましたが、生誕100年企画は、1986年12月25日、まさに漠先生が生きていらしたら100歳を迎えられたその日に開催されました。アーカイブスという意味で言いますと、この時に、いくつかの作品が復元上演され、またドイツで1923年に映画化された『美と力への道』の中で漠先生が踊られている《囚われた人》のワンシーンが上映されました。こういう企画があることによって、近代舞踊のアーカイブスにおさまる新たな資料が収集されたり、発見もされたりするのだと、強烈な印象をもったことを思い出します。

ところが、実際には、石井漠先生のご自宅は第2次大戦の時に全焼してほとんどの資料は消失したということで、プログラム、写真などは、ほとんど集まらなかったのです。現物がなかなか集まらなかったものですから、いろいろと呼びかけを

致しました。私も生誕100年企画以降、プログラム、写真、あるいは手紙などを集める努力も数年いたしましたけれども、収集できたのは20点くらいでした。

それからしばらく、何となく私も石井漠は封印してしまうような状況でございましたら、2002年に没後40年企画がありまして、またそこで関わらせていただきました。その企画でも、新たに復元された石井漠作品が上演されまして、再び石井漠が甦りました。その企画を主になさったのが、いま紹介された石井登先生であり、黒沢先生を初めとする同門会の皆さんでした。その企画によってやはり、いろいろな資料が幾つかまた出てきたということだったわけです。没後40年のプログラムには、生誕100年の時に私が作成した年譜をベースにして、石井眞木先生がさらに詳細な年譜を作成されています。今日は生誕100年の時に作りました年譜を基に作成した略年譜を配布いたしました。

先日、今回のフォーラムの打ち合わせを石井登先生といたしました時に、その後新たな資料は見つかりましたか、と伺いましたら、「いや、これ以上は出てこないでしょう」と言われました。ところが、登さんと打ち合わせを進めておりましたら、幾つか資料を発見するヒントになることがあ

りまして、探してみる、とおっしゃって下さったのです。実は、今日その資料を探し出してきてくださいました。石井漠が踊る《山を登る》のフィルムが見つかったのです。今日、初めて皆さんにお見せできます。それも今日、登さんが「見つかったよ」と持ってきてくれたものです。というわけで、予定外で、今日、その映像をお見せできることになりました。「舞踊学フォーラム」は今回が第1回ですが、やはりこのような企画を実施することによって資料は見つかるものであると痛感しております。そのような意味でも、今回のフォーラムはととてもありがたい企画です。

というわけで漠のアーカイブスの現状というのは、国立劇場の織田先生がおっしゃったようなドカンと15億円が来ることもないですし、大きい包みでドンと資料が届くこともないわけですね。それから、日本の洋舞史はもう100年になるわけですが、日本の洋舞のアーカイブスも全くと言って良いほど整備されておられませんので、日本の洋舞100年という歴史をアーカイブス化できる予算がドンと10億ぐらいもらえたら嬉しいですね、若松先生。

若松 3億でもいいじゃないですか(笑)。

片岡 ということで、第3部は、今、掘り起こしつつあるアーカイブスということになります。



《山を登る》を踊る石井漠(左)

本日は、《山を登る》の復元上演をしていただきます。《山を登る》という作品に対するリアルな情報を目から得て、また体から体へ、口で伝えていく、その口伝の様相ということも、今日は皆さんに知っていただけたらと思っております。

それではお待ちしております。黒沢先生、どうぞご登場くださいませ。お願いいたします。

黒沢 よろしく申し上げます。僕は、本当は踊りたかったんです。だけれども、パートナーがないので（今日はお嬢様の美香さんが、他の用事でお越しいただけなかったの）。

登さんは石井漠の孫なんですよ。石井先生は3人の男の子どもさんがいらっしゃいます。いちばん上は石井歓とって作曲、それから3番目の石井眞木という人も作曲をしていました。両方も亡くなってしまって、登君のお父さんはまだ生きていますけれども、いまちょっと入院していますけれども……。

先生は本当に偉大な人でした。僕は、この間も松山バレエ団から教育賞をいただいたりして、賞とか何かもらうと自然に「漠先生、ありがとう」と声が出てくるんですね。なんだか、これだけは自分で意識していないのに、不思議だなと思います。

僕はいまから62年前に石井漠研究所に入ったんですよ。土方さんと、僕は同じ歳なんです。その時《山を登る》に憧れて、この踊りをやることになったんですね。だから本当に《山を登る》は一緒にやっていきたいと思うのですけれども、僕が入った頃はそういう地味な踊りじゃなくて、戦後間もない時ですから、ワルツとかきれいなこと、だんだんバレエ的なことが多くなったんですね。研究所でも、バレエ的な稽古のほうが多かったように思います。僕が入った頃は、いまのようにテレビとかそういうのはありませんから、地方公演が特に多かったですね。僕は1月に入って、3月の中頃にもう、まだ1カ月くらしか経っていないのに、一緒に舞台に連れて行ってもらうってということでした。その時に、群馬県の教育委員会ですか、戦後すぐですから汽車に乗ってのツアーも大変なんですよ。それで、群馬県からトラックが迎えに来まして、先生とおば様（漠先生の奥様）は助手台のところで、あとはみんな衣裳を積んだまま一緒にその中に乗って、トラックで行きました。その時は石井歓さんも一緒に行きまして、いちばん最初は、僕は群馬の前橋が初舞台なんです。舞台と言っても踊っていないのですけれどもね。ただちょっと出るだけだったんですけれども。

先生の個性というのは、僕みたいがいいかげんヒョロヒョロじゃないんですよ。目鼻だちもしっかりした人ですから、何をやっても本当に見ている人に訴える力がすごいですよね。《山を

登る》というのも、本当に、今も思いだして、すごいなと思って見たのを憶えております。62年前の話なんですけれども。

片岡 その《山を登る》の話に今日は焦点を当ててまた伺っていきたいのですが、《山を登る》は石井漠先生が生きておられる間は、女性は小浪さん、栄子さん、神田さん、いろいろな方が踊られましたけれども、男性の役は、漠先生は決して譲らなかったと聞いておりますが。

黒沢 そうです。本当です。先生のように誰も踊れないですよ。あの個性は。本当に立派でした。女性パートナーは変わってはいっていますが。石井みどりさんもちろんそうですよね。

片岡 崔承喜も踊ったとか聞いたのですけれども、踊っていないですか。

黒沢 崔承喜さんは背が大きかったから、パートナーにはちょっと……。

片岡 踊っていないかもしれないですか。

黒沢 と思います。

片岡 とにかく女性パートナーはいろいろと変わりましたが、漠先生がずーっと踊られ、その後、漠先生が亡くなって3年後ぐらいに尾上松緑さんが帝劇で男の役をなさったのが、漠先生以外で初めて《山を登る》を踊った人ですね。

黒沢 そうかもしませんね。

片岡 その次が黒沢先生になるんですね。

黒沢 NHKで、日本の現代舞踊の歴史というのを……。

片岡 「日本の創作舞踊」というタイトルの番組で、1984年に放映されましたね。

黒沢 ええ。その時に《山》をやるということで。はるみさんがね。石井歓さんも「いいんじゃない」ということで、《山》をやることになったんです。

片岡 復元の作業を前年の1983年からなさって……。

黒沢 そうです。その時は、高田せい子先生、江口隆哉先生、伊藤道郎先生とかのお弟子さんが集まって、日本の創作舞踊の歴史というのをやりました。

片岡 NHKで放映された、その映像は私も放映された日に見ていて、録画致しました。黒沢先生は、漠先生以外では男の役を踊られた2代目になれるわけですね。1984年の放映の前に、秋田でも、黒沢先生と栄子先生で踊られていますね。

黒沢 そう。石井歓さんが作曲した「大いなる秋田」というオーケストラがあるんですね。その演奏会におやじさんの踊りをやりたいということになったんです。だけれども、その頃は、僕は、そういう先生の踊りというのではなくて、どっちかというワルツとかそういうのだったのですけれども、「それは石井のおやじの踊りじゃないか

ら、《山》にして」ということで、急に《山》を習って踊ったんですね。

片岡 それでは、皆さんに予告しました、石井漠が《山を登る》を踊っている映像、今日、登先生が見つめて持ってきてくださった映像をお見せしたいと思います。そして黒沢先生が石井漠の《山を登る》から黒沢輝夫の《山を登る》にしていったあたりを伺ってみたいと思います。それでは映像のほう、よろしくをお願いします。

黒沢 皆さん、ぜひ見てください。

片岡 今日お持ちいただいたのはNHKの「音楽夜話」という番組の録画映像でして、最初のほうは、漠先生がお話もしていらっしやいます。今日は時間がないので作品の部分だけお見せします。

< 石井漠が踊る《山を登る》の映像を映写 >

片岡 これは全編ではないですね。1往復しかしませんでした。実際は2往復ですね。

実は、今日配付しました資料の中に、《山を登る》について上林澄雄先生が書かれたものの一部分をお配りしているのですけれども、その中で《山を登る》はミニリズムの舞踊だということで、上林先生が大変評価しておられます。漠作品の名作として《明暗》と《山を登る》、この2作が素晴らしいということを書いておられます。

いま映像で見ましたのは作品の半分ぐらいでして、実際には、下手から上手に行き、また上手から出てきて下手に行き、下手からもう1度上手に行って、上手からセンターまで来て終わるという構図になっております。動きもまさに山を登るといふ動作だけです。登さんのお名前はこの作品にちなんで命名されたと聞いております。単純な動作、単純な空間構成で創作されているというミニリズムですね。

さて黒沢先生、動きは単純とは言え、先ほど言ったように漠先生のあの形相で、眼力のある眼でガツと見るような踊り方と、先生はその当時はまだまだお若くて、とてもダンディーで、ワルツとかが似合うような頃だったかもしれないのですが、その後《山を登る》の男のほうを踊っていく時に、どんなふうにして自分の体の中にそれを入れ込んで、また再現していくというふうになされたのか、そのあたりを何かお話いただけますか。

黒沢 一般的に踊りはたいてい動きから入るのですけれども、石井の踊りはそうじゃなくて気持ち、心から入っていく。だから《山を登る》も、最初は元気よくいきますけれども、だんだんくたびれていくというような、そういう雰囲気を出せるようにということだったんですね。《山》ばかりではなくて、たいてい石井先生の踊りは心から

入っていくというほうが多いですね。いまはバリエーションの踊りが多いですから、どうしても動きを主にしていきますよね。だけれども、「石井の踊りは心から入っていくんだよ」ということを、よく言われましたね。

片岡 漠先生が書かれた『舞踊の本質と其創作法』という本が1927年に出版されているのですが、これは漠先生の最初の本だと思うのですが、この本の中身は歩行、歩法が自分のベースであるということで、歩法だけを自分の訓練法として書いていらっしやるんですね。それがやはり、普通に並に歩くとか、跳躍で歩くとか、変形して歩くとか、歩行だけが核になった練習方法が書かれていますね。

黒沢 あります。でも僕の場合は、そういうふうなことは好みじゃないからあまりしませんでしたけれども、一応、普通に歩いて、今度はリズムを何拍子か、3拍子、4拍子にしながらということ、それを変形して、どう変形していくかということ、いろいろ稽古の中にはありました。

片岡 ですから、「歩く」がある意味、漠の踊りのベースというか、核になっているということもできるわけですね。

黒沢 そうです。基本ですね。

片岡 ありがとうございます。

黒沢輝夫先生から登先生のほうに今度踊りを引き継いだわけですね。残念ながら、お嬢様の美香さんがご都合が悪くて、今日は、黒沢先生は踊れなかったのですが、次の世代の登さんが《山を登る》の3番手の男役として登場することになります。まず再現しました踊りを登さんと土屋さんで踊っていただきたいと思います。

舞台ですと上手・下手に袖幕がありまして、袖幕に消えるのですけれども、今日は衝立もない状態で消えることはできないというのがちょっとイレギュラーでございます。

それではよろしく願いいたします。

< 《山を登る》復元実演 >

片岡 ありがとうございます。(拍手)

《山を登る》は1925初演、1926年初演という方もいるのですけれども、今から何十年前になりますか……、85年ですね。これだけ時間が経って、このように体から体へ伝えられている《山を登る》を今日も拝見できたということ、大変幸せだな、と。まさに生きたアーカイブスという感じで大変ありがたいと思います。実演のご準備いろいろありがとうございました。(拍手)

ではこのあと登先生に加わっていたら、黒沢先生をまじえて、体で伝えていったそのプロセスをちょっとだけやっていただけたら嬉しいと思

うんですね。実は、先ほど場当たりをしている時に、ここへ来る前は6月1日ぐらいにお稽古なさったんですか、それからしばらくしてこの場当たりで黒沢先生がご指導されていたのですけれども、そのポイントを見ていましたら、まさに体から体に伝わる瞬間に立ち会っているなどと思って感激してしまいましたね。そのどこか1部分、先生はさっき、腰の入れ方か何か、そういうことをなさっていましたよね。

黒沢 さすが漠先生の孫だなと思って、感心しました。

片岡 風貌がすごく似ていらっしゃるんですね。漠先生に歳とともに似てきたような…。

黒沢 よく踊れました。(拍手)

片岡 本当に素晴らしい踊りだったと思います。

黒沢 僕が言えるわけじゃないから。

片岡 そうなんですけれども、何かポイントがわかるかなと思ったんですね。動き方の。

黒沢 でも、1回言っただけでパッとわかってくれたから。

片岡 そうですね。伝えていく。また登さんが今度お子様にとか、登さんの孫にとか、伝えてほしいんですけれども、何か…。

黒沢 これからどんどん踊ってほしいよね。

片岡 登先生、今回踊ることになって、何か気づいたことがおありですか。

石井 漠先生の作品を何作か踊らせていただいたんですけれども、やっぱり普通の踊りと「間」が全然違うということと、あと、底辺の広さをすごく感じるんですね。底辺が広いというのは、小さい子から大人の方まで、いろいろ自分なりに解釈できるような作品が多いと私は感じました。「間」はやはり、たぶん石井系独特だと思うのですけれども、1つ呼吸をのむような「間」が多いです。

片岡 独特なリズムで口拍子をとるんですよね、石井漠先生のお弟子さんたちは…。特徴のある「間」。そういう「間」のことだと思うのですけれども、日本人のリズム、特色のある、漠がとらえたリズムというか…。

石井 たとえば3回目に出て来る時に、何回か物を持つようにして動く時に、普通だったらヨッと行くのですけれども、ウ、ウンという、すごい微妙な「間」があるんです。もう1度大地を踏むような「間」が。そのままポンと上がるのではなくて、もう1度踏んでから上がっていく、そういう「間」があるんですね。《山》に関しては、動きなんですけれども…。

片岡 実際に山に登る場合は、前に登り続けるだけなんですけれども、《山に登る》では、後ろに反るとか下がるということを、登ることを強調するために使っていますよね。その辺では何かな

いですか。特徴が。

石井 これは黒沢先生にご注意いただいたのですけれども、あまりこういう運動（前後に動く）はしない。逆に前なら前、後ろなら後ろとはっきりやったほうが、前に進むのが見える。あまりリズムに乗って前へ行ったら後ろ、前から後ろとやっていると、逆にそれが見えなくなってしまう。

黒沢 そういうことですよね。リズムをあんまりとるといことはいいですね。最初はやはり若さがあるから、リズムをすごくとっていました。「でも、リズムをとらないで、本当に山に登っていく感じのほうがいいんじゃない」ということを言って。

日本の踊りというのは、どうしても「間」を大事にするんじゃないでしょうか。アメリカのニューヨークのマーサ・グラハムなんか、日本人の「間」がすごくいいということで、マーサもすごく日本人が大好きということを知ったことがありますからね。さっきの舞踏の方の動きも、しょっちゅう動くのではなくて、「間」を大事にしているように思いました。それで、フッと動いた時にそれが生きてくるということがあったように思います。だから日本の国民性、そういう「間」が日本人には特にあるような気がします。

片岡 石井漠作品の舞踊譜は残っていないわけですね。ですからこのようにして舞踊家から舞踊家へ、人から人へ具体的に伝えていくということで、これからも体で伝える、口伝で伝えるということになるかと思えます。

登さんは石井漠の様々な作品の復元をしましたよね。生誕100年と没後40年で。これからは、石井漠に関する様々な資料を収集したり、作品を残したりする役割を担う筆頭になられると思うのですけれども、どうでしょうね。今日は貴重な映像が見つかったりしましたし、さらに収集整理していく可能性は見えてきていますか。アーカイブスとして。

石井 そうですね、今、うちは稽古場が引っ越したので、いままでわからなかったところに、結構いろいろな写真が出てきたりしていますので、やはりそういう記録的なことは大事に保管していきたいなと思います。

踊りに関しても、漠先生の踊りをご存じの方は誰がやっても「それは違う」というふうになるのですけれども、やはり作品を形として残していくのは大切だと思うので、これから機会があるごとに、掘り起こしていきたいとは思っています。

片岡 そうですね。ダンスワークの長谷川六さんが生誕100年の時に貴重な本を編集なさったのですけれども、彼女とその本をつくる86年の10月でしたか、映画のフィルムセンターが日本にもあるんですが、そのフィルムセンターに行きました

ら、漠がドイツで映画に出た時の《囚われた人》を踊る姿を見ることができたわけですね。私も漠が具体的にこの人と思って見た映像は初めてだったのですが、長谷川さんは、その映像を見てひれ伏してしまったぐらい感動されて、「ああ～、石井漠よ～」というふうに言っていたんですね。そういう映像がこれからまた漠については見つかるかもしれないし、映像も含めいろいろな資料を、それぞれの時代を牽引した舞踊家の資料というものを私たちも大事にしていきたいと思えます。また、今日初めて漠のことを知った若手の学生や研究者の方々もいらっしゃると思いますが、今日、映像も初めて見た方もいるかもしれません。1915年に第1回公演をなさった日本の現代舞踊の出発点のような舞踊家石井漠の資料を見ることによって、今、自分たちがどこにいて、どういう距離にあって自分が研究したり踊ったりしているのかということも測れますし、これからさらにアーカイブスが重要になってくると思えます。漠についてもまた資料が集まってほしいと願っております。

今日はお2人に、具体的な《山を登る》についてお話ししていただいたたり実演していただいて、本当にありがたかったと思っております。ありがとうございます。(拍手)

最後に、前会長である若松美黄先生からアーカイブスのことに関してお話をいただきながら、第3部をしめてまいりたいと思えます。若松先生、どうぞよろしく願いいたします。

若松 お手元の資料で英文の資料があると思えます。インターネットで今、ニューヨーク・パブリック・ライブラリーにアクセスすると、石井漠先生の映像を見ることができます。というのは、1990年に(社)現代舞踊協会が「日本の現代舞踊」というDVD全6巻を制作しました。その映像がニューヨーク・パブリック・ライブラリーに所蔵されていて、石井漠先生から、私もチラッと入っています。しかし、実は著作権に関して、いろいろな難しい複雑な問題がありますので、販売できないんですね。ですから、これをどうやってみんなりに渡せるのかという、むずかしい問題があるのですが……。

片岡 そうですね。寄付ということになっているんですね。寄付をするともらえるという形で販売はできないんですね。

若松 ええ。幾らかのお金を現代舞踊協会のほうに寄付していただくと、即座に記録としていただいいただく。たとえば舞踊学会にも差しあげたいのですが、あげてどこに置くかという問題が出てくるというふうなことで、実際はいま、そういうふうに進んでおります。「日本の現代舞踊」というDVDをつくった話は、日下四郎さん

は舞踊学会の会員なので、いつか機会を得て、「どういう人を選んだの?」「どういうふうな視点でDVDをつくったの?」という話は、また別の機会にしなければ、とても混乱するので、今日はその話はカットします。

1点だけ。踊りを記録するという以外にも、サイン的な記録もあれば、シンボリックな動きもあるので、それをごっちゃにして「記録する」と言われても、ちと困っちゃうところがある。江口隆哉先生の作品を再演するという時に、宮先生のところに藤井修二さんが電話をしたら、「絶対に、死んだ人の作品なんて記録が残るはずがない。舞踊というのは、その人が死ねばおしまい。そういうのを残すのはよくない」と怒鳴られたと言って、NHKにはついに江口先生の記録がないんですよ。

そんなようなことが1つあって、一昨日の日ですか、いまロシアのIDTFという、シアターXでチェーホフの生誕150周年をやっているのですが、キャリアギンさんという僕の最も大好きな尊敬している天才の俳優さんがいるのですけれども、この人が1時間ぐらい講演してくれて、キャリアギンさんのすごくよいところと日本の演出家の質問がだぶったことが、ちょうどこのテーマに当たるかと思うんです。キャリアギンによると、「人生のいままで生きていたこと、うんと稽古をして完全に台本が入っているのだけれども、自分の人生をずっと生きて朝飲んだコーヒーまでが自分の役割になればチェーホフは演じられないよ」と言ったんです。それに対して日本の俳優さんは、「じゃ、混乱するだろう。毎日コーヒーも飲むし、豆も食べるだろうし、どうするんだ」と言って、言葉の問題で相互に非常にトラブルになっていく。

つまり、踊りだけは、継承というのは簡単にいなくて、僕も半分ぐらい死にかけているのですが、死にかけているということを受容することもダンスのつくり方と、それからアブストラクトにあるコンセプトをつくり続けることと決定的に違って、それは非常に大きい課題で、ただ記録をそっくり残せばいいというふうには単純にはいかないというのが最終テーマじゃないかね。今日ね。

初めての試みなんですよ。こういうアーカイブスを残そうというのは。アーカイブスそのものも、ただ客観的にあるものを整理すればいいというふうには誰も考えていないのですけれども、舞踊の時にこんなに難しい問題が山ほど出てきたということも、今日の1つの大きな収穫だと思って、企画を立てていただいて、ありがとうございます。

ということで、私のほうはこれで終わりたいと思えます。(拍手)

片岡 若松先生に第3部をめたくしめていただきました。ありがとうございます。

黒沢輝夫先生，石井登先生，土屋さん，ご協力ありがとうございました。そして企画委員の皆様ありがとうございました。(拍手)

貫 若松先生，片岡先生，また黒沢先生，石井先生，どうもありがとうございました。皆さん本当に素晴らしい，こんなに時間ぴったりにすべてが終わるというのは，さすがに舞踊学会だなという感じなのですけれども，あと2分を残して終わってしまいました。ちょうどいい時間でございますので，これで第1回の舞踊学フォーラム，しめとさせていただきますと思います。

繰り返しになりますけれども，初めに入口のところでお配りいたしましたアンケートをぜひ，どんなことでもかまいませんので，お書き込みいただきまして，回収させていただければと思います。このフォーラムは今回が第1回で，来年度以降，また第2回，第3回というふうにやっていきたいと思っております。その企画の参考にもさせていただきますので，ぜひアンケートのほう，よろしく願いいたします。

どうもありがとうございました。(拍手)

註：《山》は《山を登る》を指す。お話しの中で《山》と話された時にはそのまま《山》とした。

(文責 片岡康子)